

【ライントレーダーの基本のキ】

高値、安値の点と点を結ぶのがラインになりますが、その点は無数にあり、必然的に点と点を結ぶラインも無数に引けるからこそ、

どうラインを引き、残していくのかに、その人の思考の深さが現れてきます。

ただなんとなくラインを引かない。

引けちゃっているラインでトレードしても、自分がそのチャートを明確に認識できておらず、迷子になっちゃう可能性が激しく高くなります。

様々なインジケーターや手法、テクニックなどがあるが、それら全てを内包するチカラがラインにはあります。

- ・ダウ理論（大ダウ、中ダウ、小ダウ）で引く
- ・左のターンから影響を受ける意識を残す
- ・対象理論で引く（交差対象、並行対象）
- ・エリオット波動で引く

など、どのようなラインを引いて残すのか？

その背景となる理論は数々あり、これから詳しく解説していきます。

一つのラインを引いて残すにしても明確な意図を持って、自分がどのように相場の波を捉えているのかを視覚化する意識で、これから解説することを踏まえラインを引く訓練を地道にコツコツと積み上げていきましょう。

1. トレンドラインの引き方（基礎編）

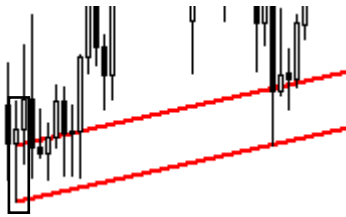
ラインには、大きく分けて斜めの世界観（トレンドライン）と横の世界観（ホリゾンタルライン）があります。野田式FX道場では、相場には傾きがあるという考え方から、斜めの世界観を見ているケースが多いため、まずはトレンドラインの解説から進めます。

1-1. トレンドラインの引き方の基本 その1

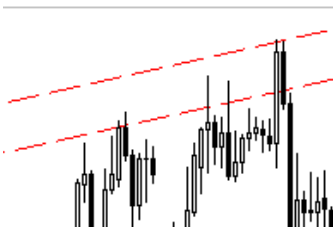
上昇トレンドでは、安値と安値を結ぶ上昇トレンドラインを引きます。



※直近の高値に合わせてチャネルラインも引いていくのを基本とします。



※上昇トレンドラインの始点となったローソク足のヒゲの長さでゾーンをとります。



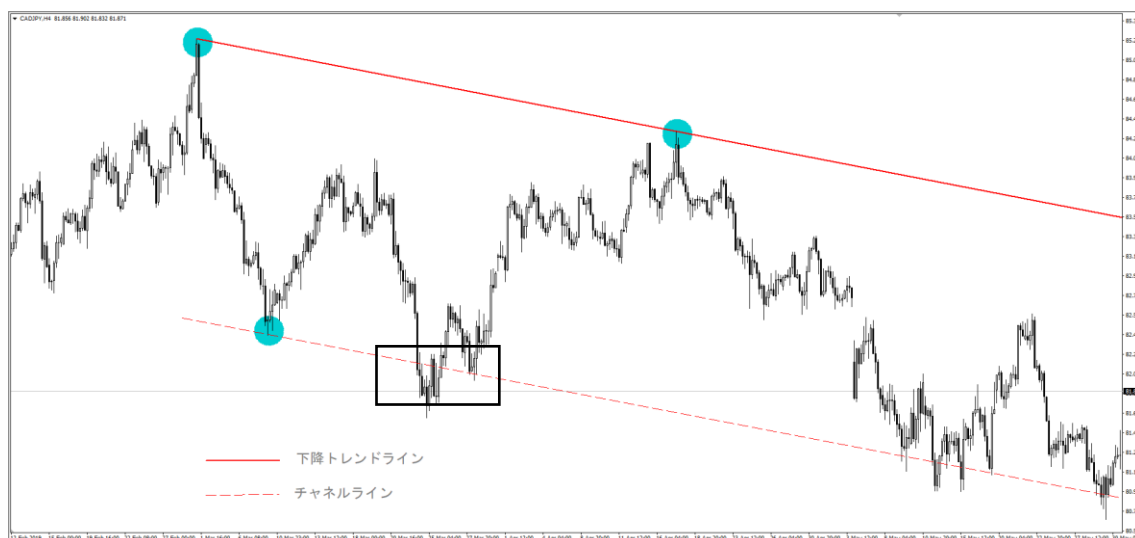
※チャネルラインのゾーンはトレンドラインのゾーンと同じ幅を取ります。

（これは基本の型をお伝えしています。中級、上級に進むと違う考え方も取り入れます）



上昇トレンドラインとチャンネルライン、ゾーンを取るとこのようなカタチになります。

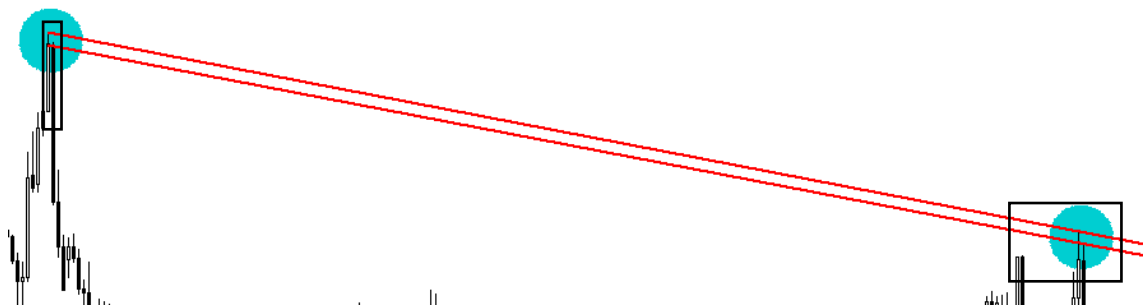
逆に下降トレンドでは、高値と高値を結ぶ下降トレンドラインを引きます。



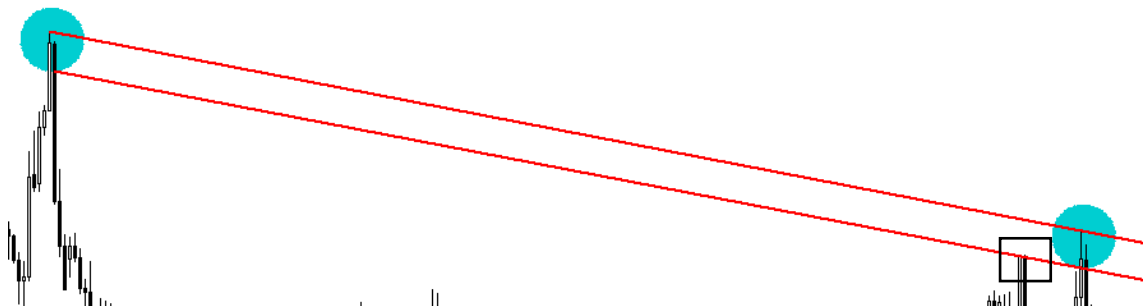
※直近の安値に合わせてチャンネルラインも引いていくのを基本とします。

ただし、今回のケースのように四角い枠のところで抜けてきた場合は、抜けた箇所がある場合は、抜けていないところで引き直すこともあります。

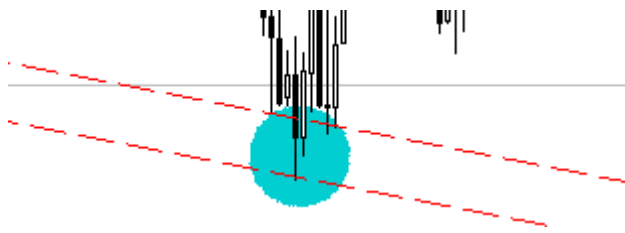
(次ページの図を参照)



ゾーンは始点のヒゲでとるのが基本ですが、上図のように終点の方の実体の意識が強く残っているなど、痕跡が確認できるときは、そちらをゾーンとして採用することもあります。



ただし、これが正解というゾーンの取り方はありません。
その時々相場状況により、許容幅を取るのがゾーンの考え方ですので、あなた自身がどのくらいの幅を許容できるのかによって変えていってください。



※チャネルラインのゾーンはトレンドラインのゾーンと同じ幅を取ります。
 (これは基本の型をお伝えしています。中級、上級に進むと違う考え方も取り入れます)



下降トレンドラインとチャネルライン、ゾーンを取るとこのようなカタチになります。

(注) 基本に忠実に、まずはシンプルに捉えていく。

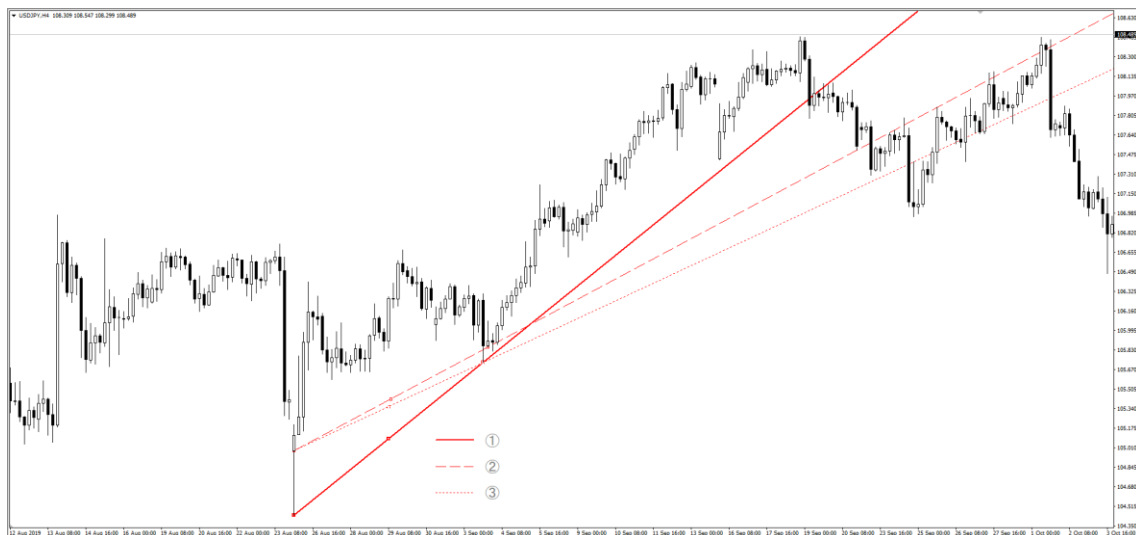
上昇トレンドで、高値と高値を結ぶラインを高値切り上げライン
 下降トレンドで、安値と安値を結ぶラインを安値切り下げライン

と呼びますが、キチンと使いどころと定義をご自身で説明できる状態になるまでは
 高値切り上げ、安値切り下げラインは使わないようにしましょう。

1-2. トレンドラインの引き方の基本 その2

- ① ヒゲとヒゲで引く
- ② 実体と実体で引く
- ③ ヒゲと実体で引く

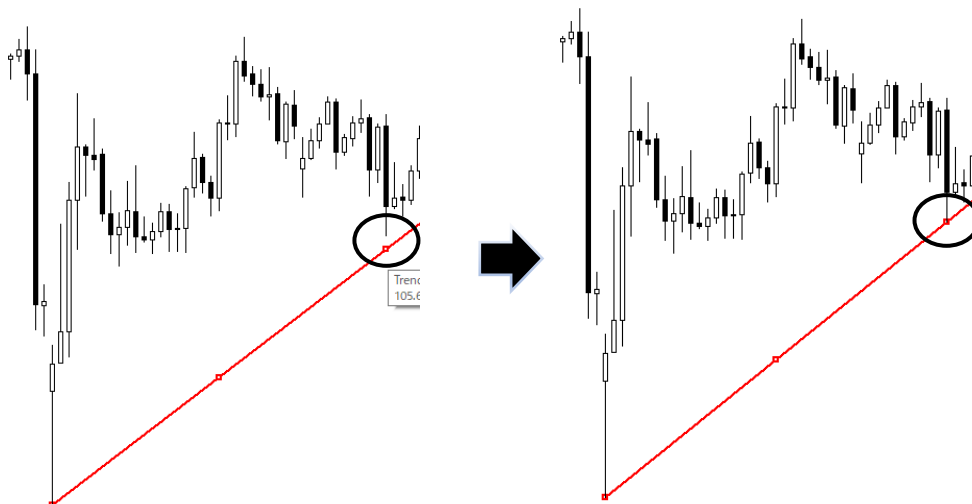
この3通りの引き方がありますが、①ヒゲとヒゲでひくことを基本としていきます。



※御覧のように②③も意識が残っていますが、最初は①ヒゲとヒゲの引き方で練習します。

1-3. トレンドラインの引き方の基本 その3

ローソク足にマグネット機能をつかって、ピッタリとラインをつけていきます。



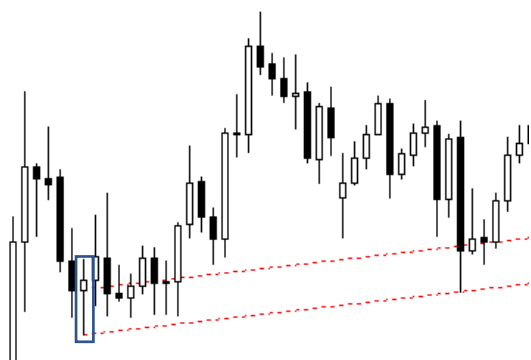
引きたいローソク足付近にポイントを持っていくと、ピッタリと吸い付きます。

1-4. トレンドラインの引き方の基本 その4

このように長いヒゲがついたローソク足は、ケースバイケースでラインを引く時は無視することもあります。



1-5. ゾーンの取り方の基本



トレンドラインの始点となるローソク足のヒゲの長さでとるのが基本。チャネルラインのゾーンも、この始点となるローソク足のヒゲの長さでとることが多いです。(同じゾーンの広がり意識されていく)

※これらが基本ですが、相場状況に合わせて臨機応変に合わせていくこともします。
※ただし、最初はシンプルに相場の全体像を捉えることを優先して練習してください。

2. トレンドラインの引き方（ダウ理論 大ダウ編）

トレンドラインの引き方にも色々あり、まずはライントレーダーの基本のキとして、野田式 FX 道場で解説されているダウ理論（大ダウ）に基づいてラインを引いていく方法を解説します。

2-1. ダウ理論の再確認

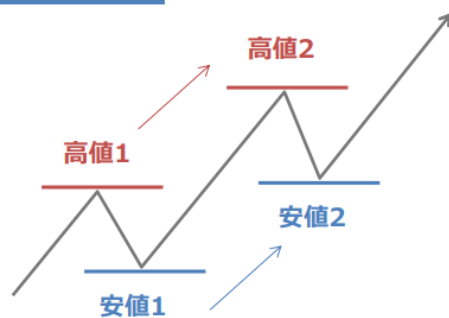
トレンドラインは、上昇トレンドや下降トレンドが発生したことを確認できて始めてひくことができます。これがダウ理論に基づいて引くラインの基本中の基本になります。

では、ここで改めて野田式 FX 道場のダウ理論の講義から該当部分を確認してみましょう。

2-1. トレンドの定義

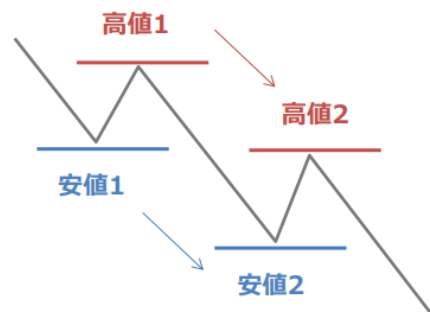


上昇トレンド



上昇トレンドは
安値と高値が切り上がって推移する

下降トレンド

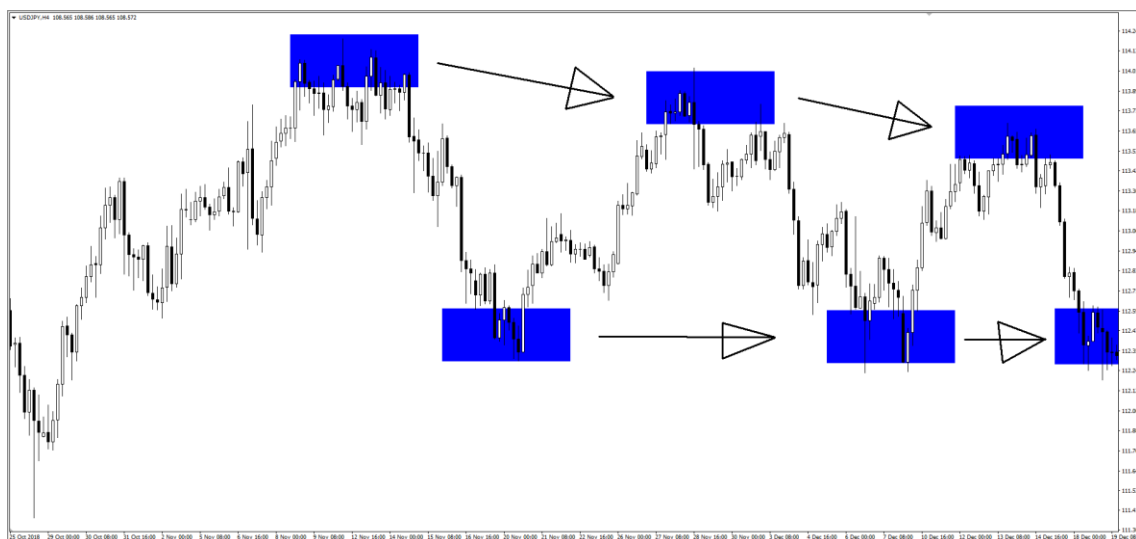


下降トレンドは
安値と高値が切り下がって推移する

トレンドは、安値と高値の推移から判断する

トレンドの定義は簡単で、安値と高値が切り上がって推移しているのか、それとも切り下がって推移しているのか、の判断基準で定義しています。

ではここで下図のようなケースを考えてみましょう。



ダウ理論では、下降トレンドは高値と安値が切り下がって推移するという定義です。

上図のケースでは、高値は切り下がって推移していますが、安値は切り下がっておらず、並行に安値をキープしています。

ラインを引いてみると、下図のように下降トレンドラインとチャネルラインは引けますが、ダウ理論的には下降トレンドが発生しているケースとは違うという意味で注意が必要です。



2-2. ダウ理論（大ダウ）に基づいてラインを引く



それでは早速、このチャートでラインを引いていっていきましょう！と言っても最初は直ぐには難しいと思いますので、ラインを引く前に基本的な相場認識をしていきます。



このように高値と安値が切りあがって推移している相場状況は、上昇トレンドと認識でき上昇トレンドラインを引いて、上昇の勢いがどの程度なのかを視覚化していきます。

1項の基本1-1～5を参考に、上昇トレンドと環境認識したチャートで上昇トレンドラインを引いてみましょう。



これ以外にもたくさん引ける箇所がありますが、今回は①②③の事例を示しますので、これらのラインの中から、この相場を現すのに適しているラインを取捨選択します。

まず、①のように急な角度のラインは引かず、②と③のようにできるだけ緩やかなラインにしていきます。また、相場の全体認識をしていく時には②と③のように一度もブレイクされていないラインを選択していきます。

では、緩やかなラインとして残した②と③の内、さらに取捨選択してどちらを残すのかというと、チャンネルラインを合わせて確認します。



※③の点線の方のチャンネルラインの方が利確ポイントになっている可能性が高いと確認できます。

また、ゾーンをとってみて合わせてみます。



※ゾーンでも③の方が利確ポイントとして意識されている可能性が高いと確認できます。

このようにチャネルラインをつくってみて、ゾーンもとってみて、現在の相場を現すのに適したラインがどれかを判断して残していきます。

(注1) あくまで現段階で残すかどうかを決めています。

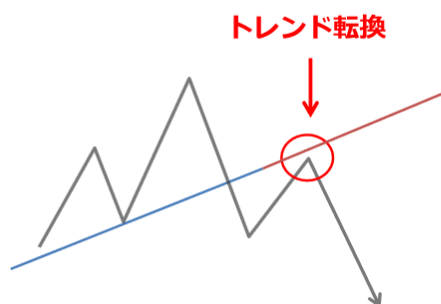
(注2) 将来的に上昇トレンドの勢いがより強くなれば、②のラインの方が意識されだす可能性があります。その時は②のラインを復活させていきます。

(補講) 新規エントリーポイント

3項では、ラインを使ったトレードの話になっていきますので、どのようなタイミングでエントリーするのかを補講としてお伝えしておきます。新規エントリーする場合、野田式FX道場では、ブレイクアウト戦略 or 3点タイプの右肩のみが推奨されています。

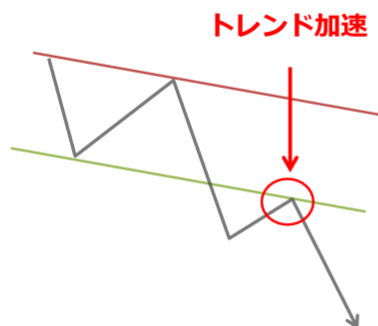
(ブレイクアウト戦略)

① 買い → 売りに力が変化する場合



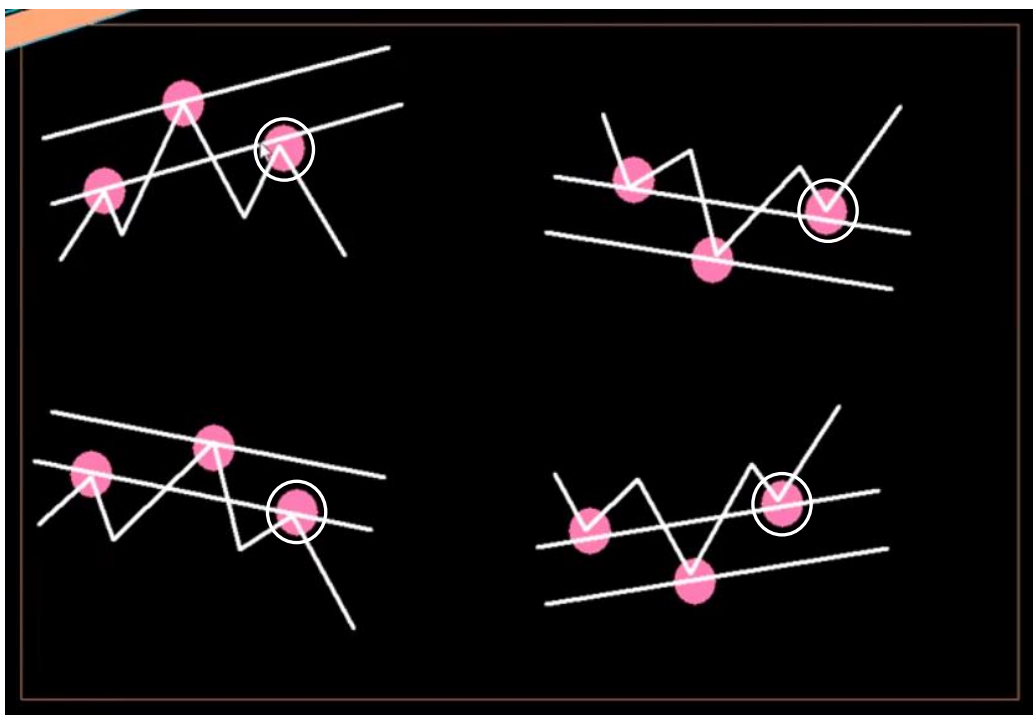
・トレンドラインのブレイク

② 売りの力が加速する場合



・チャネルラインのブレイク

(3点タイプ：白丸のところが右肩)



※ただし、これらのカタチになったら必ずエントリーするという話しではありません。
※相場の全体観を捉え、シナリオ構築でき、優位性の高い場所でエントリーします。

3. テンンドラインでのトレードシナリオ構築（ダウ理論 大ダウ編）

2項までで以下のように上昇テンンドラインとチャンネルラインを引いて相場の全体観を認識しています。



ここからどのようなシナリオでトレードしていくのかを検討します。
大前提は、前ページの（補講）でお伝えしたエントリーポイントです。

（シナリオ1）買いのテンンドが加速するパターン



※チャンネルラインをブレイクした後のリターンムーブで買い（ロング）エントリー

(シナリオ2) 上昇のチャネルラインをブレイクした後に戻ってきて、下降トレンドに転換するパターン



※小ダウでも直前の安値を切り下げていることを確認する。

(シナリオ3) 上昇トレンドラインをブレイクして、大ダウでも買い→売りへトレンド転換するパターン



※小ダウでも直前の高値を切り下げていることを確認する。

(シナリオ4) 上昇トレンドライン一度をブレイクして戻り、上昇トレンドへ意識が復活するパターン



以上、4つのシナリオを想定し、トレンドラインとチャネルラインの真ん中ではトレードを見送り、ラインの際に来るタイミングになるまで待つというのが大ダウ目線のラインプレーヤーの戦い方の基本です。

そうすると、トレードできる機会は少なくなりますが、複数通貨を監視対象にすることで、トレードする機会を増やしていく方もいらっしゃいます。

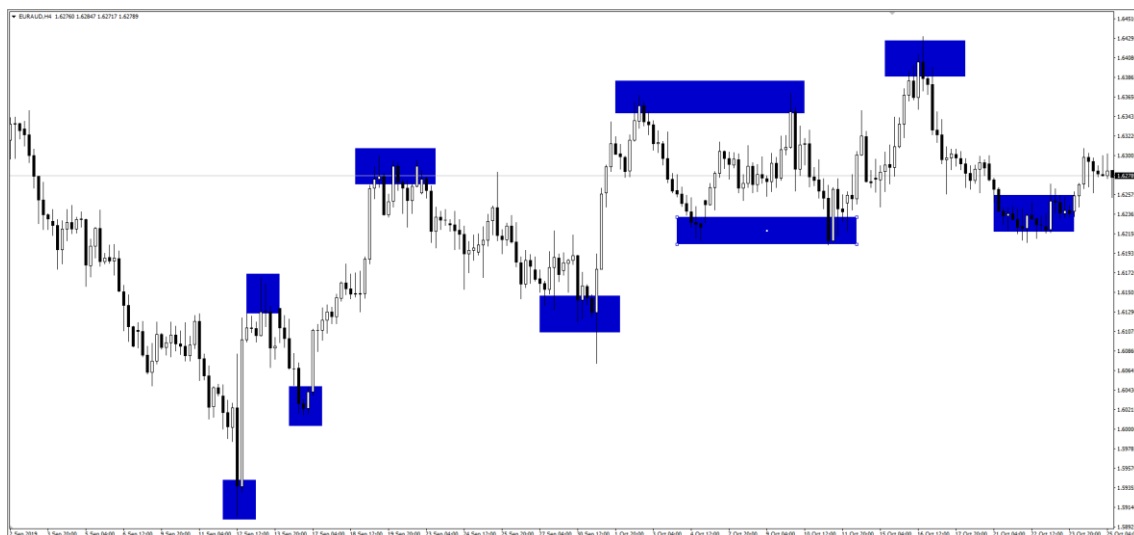
次ページからは、斜めの世界観（トレンドライン）に加え、横の世界観（水平線）を組み合わせ、大ダウに基づくトレードの勝率を上げるための考え方を、事例とともにお伝えしていきます。

3-2. 事例その1

この局面でダウ理論（大ダウ）を使ったトレードシナリオ構築をしていきましょう。



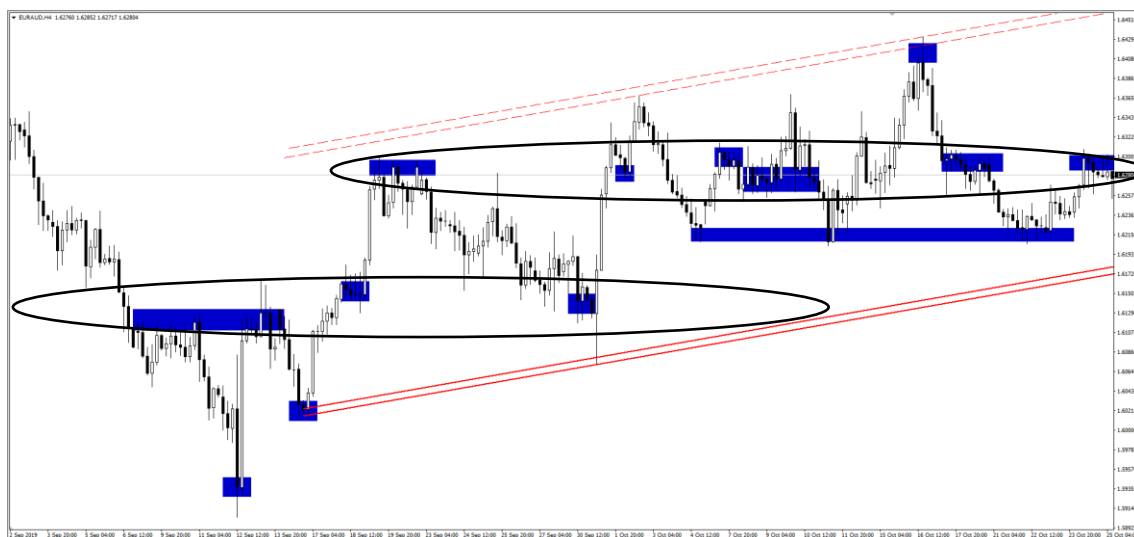
まず高値安値の推移を確認します。



高値安値が切り上がって推移している上昇トレンドと認識し、上昇トレンドラインとチャネルラインを引いていきます。



一度もブレイクされていない上昇トレンドラインを選択して残してチャンネルラインを引きます。これで斜めの世界観の全体像は把握できました。これに加え、横の世界観（水平線）も追加で考えていきます。



※トレードのシナリオ構築する時は、斜めの世界観（トレンドライン）と横の世界観（水平線）の両方で高値安値の推移を確認した方が勝率は高まります。

楕円のところで密集している高値と安値の転換も横の世界観では意識が必要で、水平線でも力が入れ替わっている転換点を面で捉えるためゾーンをとっていきます。



上昇トレンドライン（ゾーン）と水平線（ゾーン）と、現在の価格の位置関係から、一つのシナリオとして上昇トレンドラインをブレイクした後のリターンでショートエントリーを検討できます。

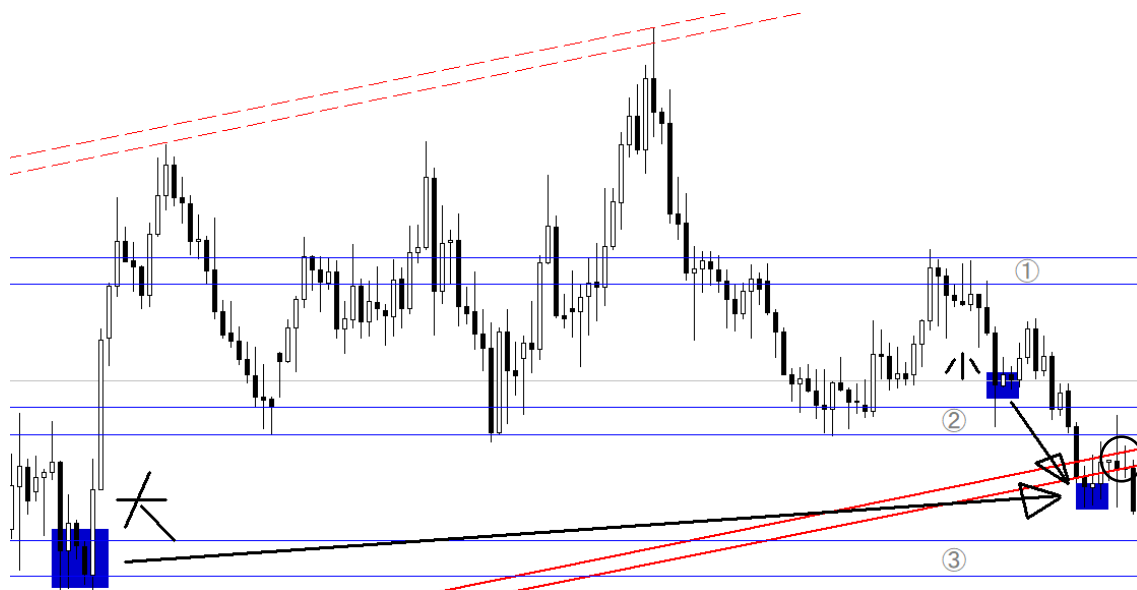
更に言うと、トレンドラインを抜けて下落するターンを想定すると、水平線②もブレイクした後のリターンとも重なることが想定でき、エントリー根拠が2つ重なってきます。（ただし③の水平線のサポートは注意が必要）

それでは、その後の推移を確認してみると、こうなっています。

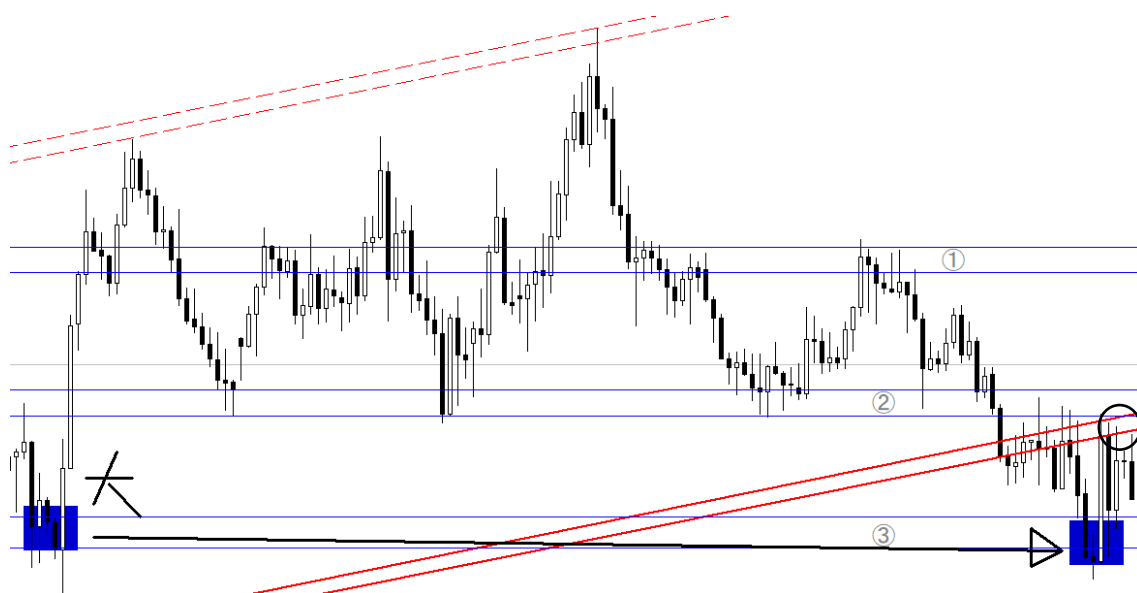


一度目の黒丸でのリターンムーブは一度下落するも③の水平線ラインでサポートされています。2度目の黒丸でのリターンムーブでは、買いプレイヤーのロングを一度処理しているため売りの勢が強くなり、③の水平線を突き抜けて下落していています。

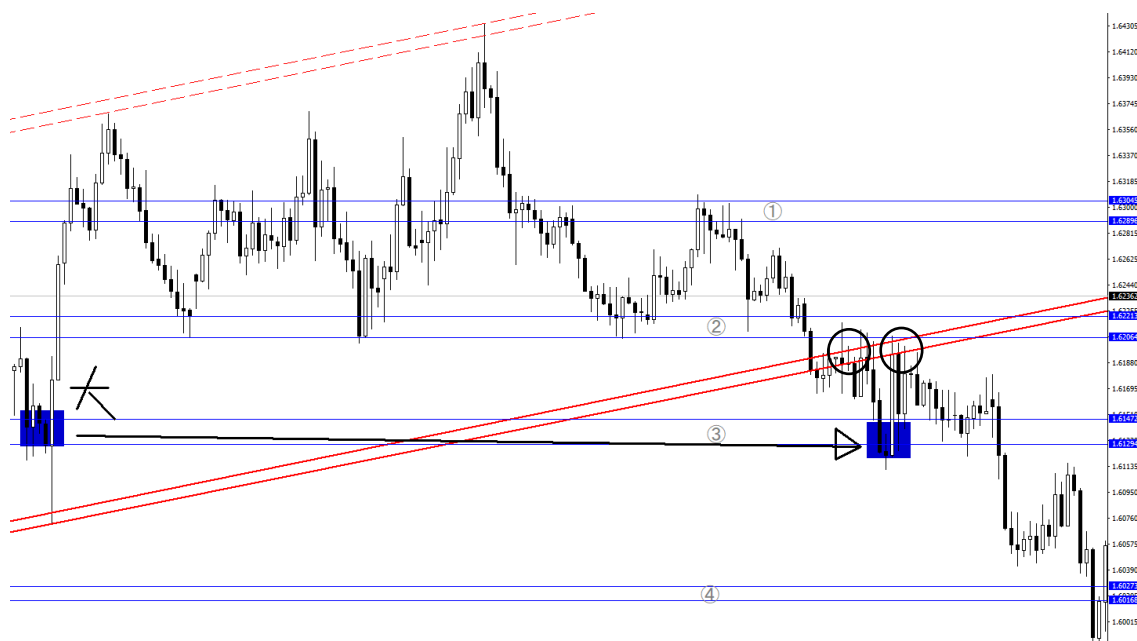
もう少し詳細に見てみましょう。



一度目の黒丸の段階では、小ダウでは安値は切り下がり、上昇トレンドラインも実体で抜けて下降トレンド続伸しそうな状況（リターンムーブは起きている）ですが、大ダウの安値はまだ切り下がっておらず、水平線の③にサポートされる可能性のある局面です。

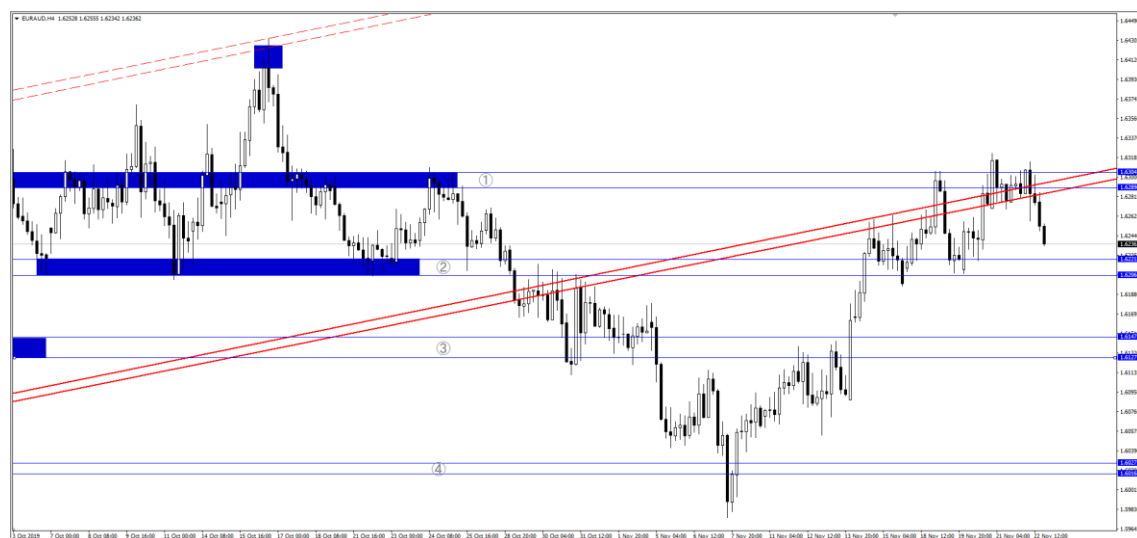


もう少し時間経過してこの二度目の黒丸の状況では、若干わずかですが、大ダウの安値を実体で比較すると切り下がっている状況が確認でき、この水準で待っていた大ダウのロングアの買いが入り、上昇トレンドラインまで上昇して、この勢力の買いが一度処理されている中でのリターンムーブの動きとなっています。



このため、上図の2度目の黒丸でのショートは、勢いをつけ水平ライン③の更に下の④も突き抜けていきます。

そして、さらに時間を進めると、こうなっています。



大ダウという大きな波で戦っていたとしても、一方向でトレンドがグイグイと進むことは稀です。どこで着地（決済）するのも含めてシナリオ構築していく必要があります。

今回の事例で言うと、④の水平ライン（2つ下のゾーン）で収益ロックするか、決済することを検討するイメージになります。

3-3. 事例その2

この局面でダウ理論を使ったトレードシナリオ構築をしていきましょう。



まず高値安値の推移を確認します。



高値安値が切り上がって推移している上昇トレンドと認識し、上昇トレンドラインとチャネルラインを引いていきます。



始点のヒゲでゾーンをとって見たところ、黒丸内のヒゲが気になるため、ゾーンを広げて対応してみました。



始点側のヒゲとも合ったことから、このゾーンの幅をとります。

上昇トレンドラインのチャネルラインは、ロングプレイヤーの利確目標値となっていることが想定できますが、今回のチャートでは、その利確目標値まで伸びる上昇推進力が時間経過とともに落ちている傾向が読み取れます。(矢印の角度)

このことから、上昇トレンドラインをブレイクした後のリターンムーブを狙える状況になる可能性が、シナリオの1つとして想定できます。



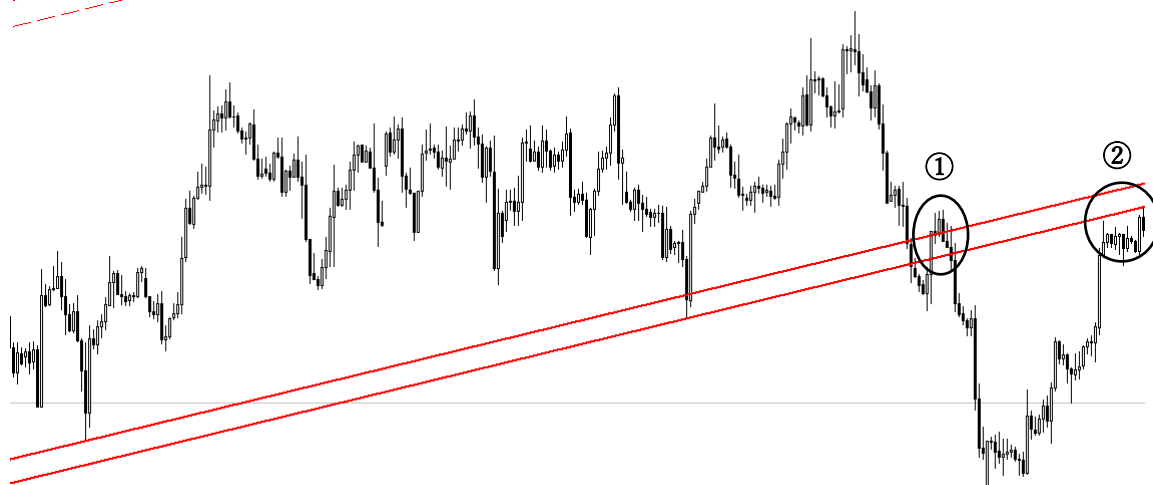
ここで、シナリオ構築の精度を高めるため、横の世界観（ホリゾンタルライン）でも高値安値の推移を確認します。

楕円のところで密集している高値と安値の転換も横の世界観では意識が必要で、ホリゾンタルラインでもゾーンをとっていきます。



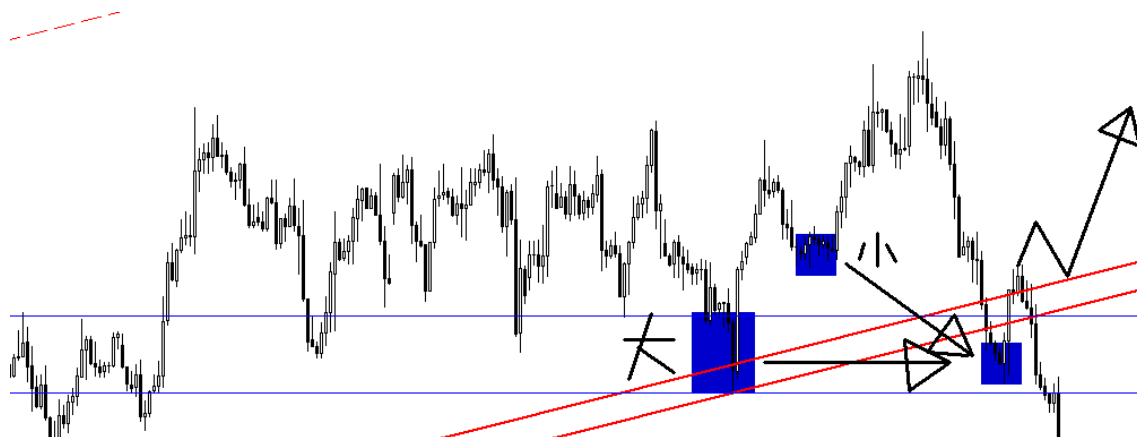
上昇トレンドライン（ゾーン）とホリゾンタルライン（ゾーン）と、現在の価格の位置関係から、上昇トレンドラインをブレイクしても、ホリゾンタルラインのサポートを抜けないとダウ理論としての安値の切り下がりが起きないことも想定しておきます。

その後の推移を確認してみると、こうなっています。



小ダウ想定のリターンムーブ①では、上昇トレンドラインを一度ブレイクしていますが、水平ラインにサポートされて再び上昇しています。

この①の前のターンをダウ理論に基づいて考えてみると、こうなります。

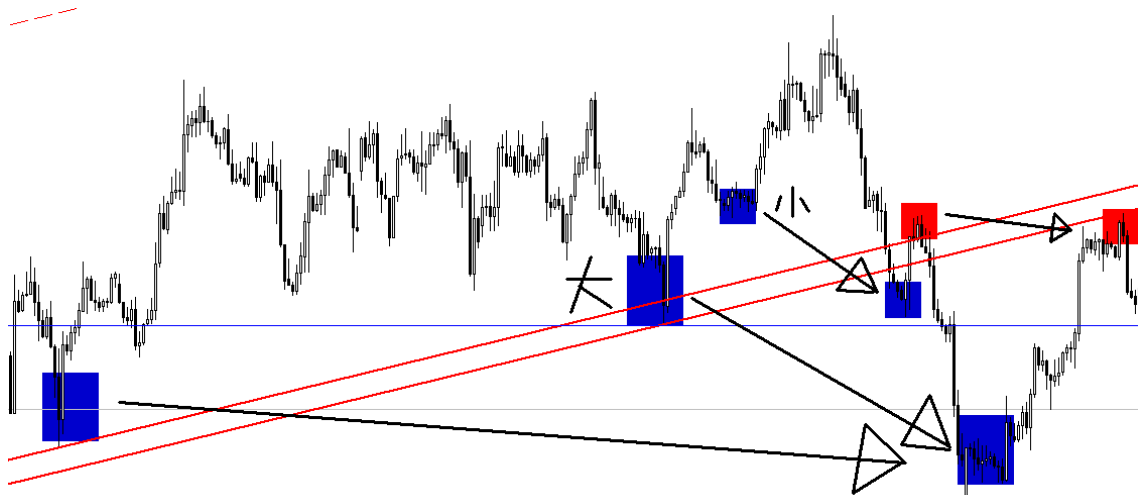


(小ダウの安値は切り下がったが、大ダウの安値はキープしている)

(リターンムーブの上げの局面はトレンドラインゾーンを抜けて戻って、上昇トレンドの意識の復活も想定できる状況)

この小ダウのタイミングでトレンド転換とみなしてリターンムーブで入ることも可能ですが、ゾーンを適切に広くみていない今回のようなケースでは、抜けてまた上昇トレンドに戻ったと勘違いする可能性もあり得ますし、実際に上昇トレンドへの意識の復活になった可能性もあり得ます。

以上のことから、大ダウの安値の切り下げを確認してからのリターンムーブで入った方が分かりやすいのが今回のケーススタディの特徴です。



(大ダウでも安値が切り下がった後のリターンムーブ かつ、赤枠の高値もゾーンの内側からゾーンの外側に切り下がっている)

時間を進めてみると、このように大ダウのリターンムーブを待って入った方が一気に下がった局面だったことが分かります。



※ただし、大ダウの戻しがなく一気にトレンドが続伸するケースもあります。

※絶対にこうなるというのは相場の世界にはありません。状況に応じてシナリオ想定して臨機応変に対応していく心構えでください。

3-4. 事例その3

この局面でダウ理論を使ったトレードシナリオ構築をしていきましょう。



まず高値安値の推移を確認します。

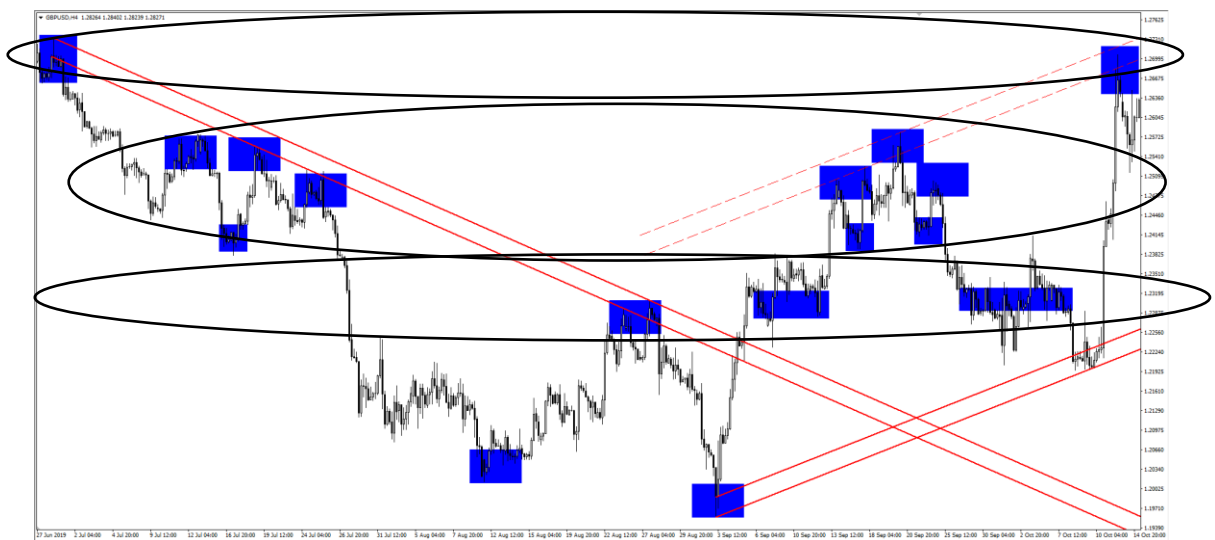


縦のラインより左側は高値安値が切り下がって推移していましたが、右側は高値と安値が切り上がって推移し始めており上昇トレンドに転換していると想定できます。

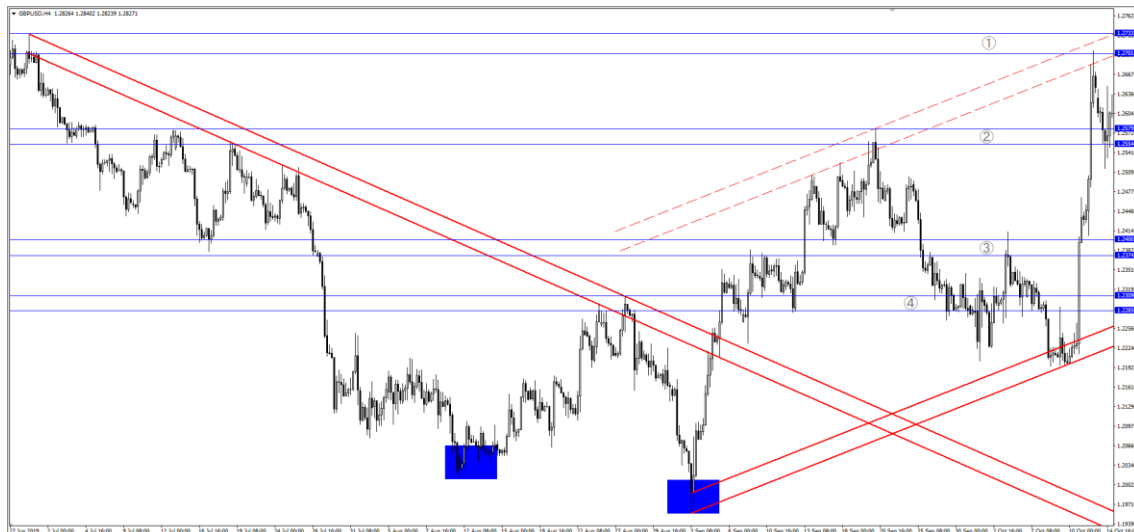
こういったケースでは、左側の下降トレンドの下降トレンドの影響もあることから、下降トレンドラインと上昇トレンドライン、チャネルラインを引いていきます。



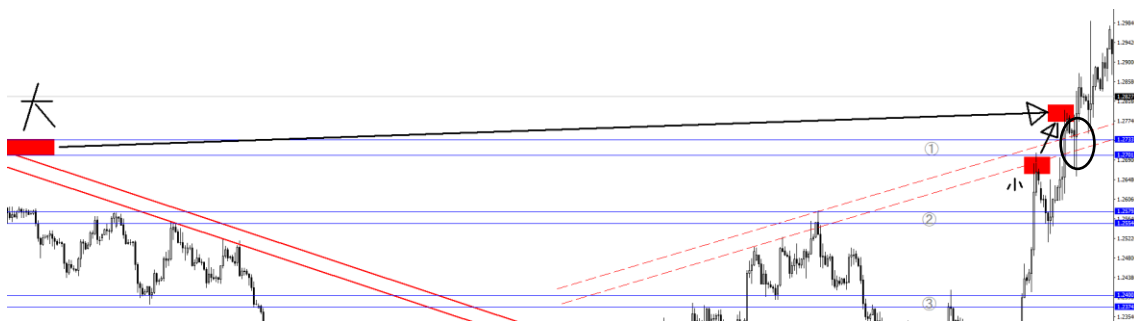
下降トレンドラインを離れて上昇している局面だと認識できるため、下降トレンドへの意識の復活よりも、上昇トレンドの続伸の局面が想定可能な状況です。



ここで、シナリオ構築の精度を高めるため、横の世界観（ホリゾンタルライン）でも高値安値の推移を確認します。



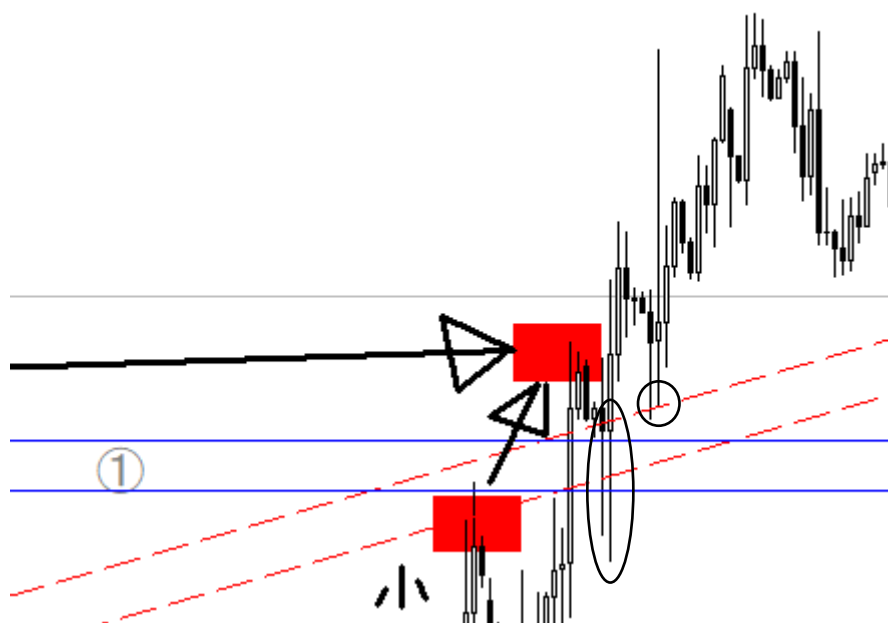
上図の一番右の部分で一度高値トライして失敗し落ちていますが、②の水平ラインでサポートされて一度止まっているように見えるため、上昇の勢いは弱まっておらず、チャネルラインを抜けて、上昇トレンドが続伸する可能性を、シナリオの一つとして想定できます。



チャネルラインを突き抜けた段階で、小ダウ、大ダウともに高値の切り上がりを確認できるため、黒丸のチャネルラインブレイクした後のリターンムーブでロングエントリー可能だが、このタイミングだとチャネルラインを下割れした大きなヒゲが出て、この間の判断に難しさが残ります。

(次ページで拡大図でも解説します)

(拡大図)



一度目の黒丸でのチャネルラインブレイクした後のリターンは下ヒゲが長く出ており、ロングエントリーしたとしても、含み損の局面があり難しい判断が必要だが、二度目の黒丸のポイントでは、下ヒゲがゾーンの上側の際で止まっており、少し待ってからエントリーしても良かったと、結果論として言える。

これは結果論であって、二度目の黒丸のような下ヒゲをつけることなく、そのまま上昇するケースもあります。

※未来は予測できないという大前提があり、その中でシナリオ想定してなんとかしていくことが勝てるトレーダーの思考回路です。

更に時間を進めてみると、このようになっています。



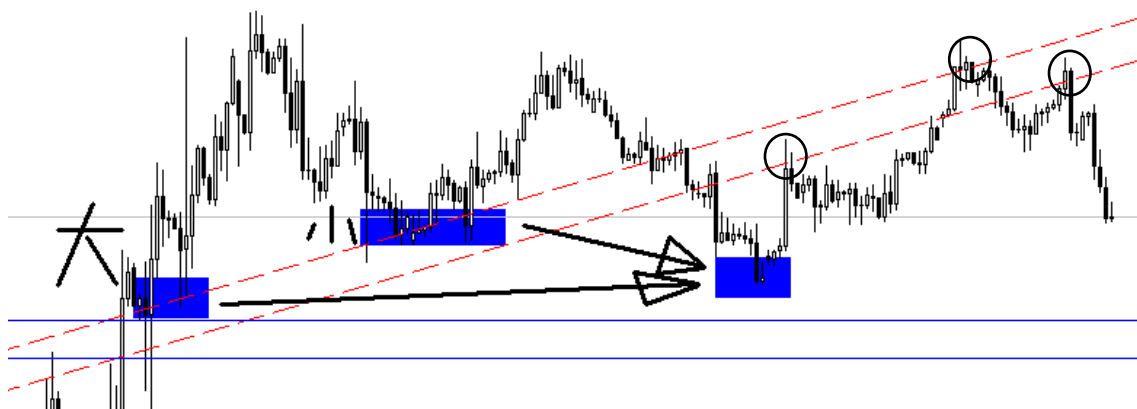
一度ブレイクしたチャネルラインを再び下落して割り込んできています。
この形は天井型の3点タイプの右肩想定ショートエントリーが可能な局面です。



右肩でショートエントリーできますが、チャネルラインのゾーンは再ブレイクして上昇しないもののジリジリとした上昇局面が続き、早めにエントリーしていると含み損を抱える期間が長く続く局面になっています。

(次ページの拡大図でさらに詳しく見ていきます)

(拡大図)



小ダウでは安値の切り下がりが起きていますが、大ダウの安値のところまでは落ち切らずに反発してしまったため、まだ大ダウのロングの買いが発動していないことからギリギリとした上昇局面になっていると想定できます。

前ページの大きな視点での右肩の中でも、小さな視点で3点タイプが生まれ、右肩で下落が始まっていることから、大ダウのロングの買いが発動しても振り落としていけるかどうか？

水平ラインを下に抜けていくと、大きな下落局面になっていく可能性のあるシチュエーションになります。(抜けられなかったら、再び上昇局面になる可能性もあり)

と、こんな感じでいくつかのシナリオを想定して、上図の右肩でエントリーした場合、どこで決済すべきか、収益ロックすべきかを考えていきます。

本 PDF の内容は【ライントレーダーの基本のキ】であり、初歩的な部分に焦点を絞った解説になっており、ラインの引き方とトレードする上で見るべき視点を「ダウ理論の大ダウの推移」に絞っています。(少しだけ小ダウの話もありますが)

これから先の世界へと進むための足腰を鍛えるための基礎トレ、ベースになる考え方となります。

野田式 FX 道場ではこの先に、初級、中級、上級の世界が待っています。

この先の深淵な野田式 FX 道場の世界で迷子にならないためにも、まずは本 PDF で解説した、ダウ理論の大ダウ（小ダウ）の視点について徹底的に練習して使いこなせるようになっていきましょう！